様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：２４４０５
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１３１３８

研究課題名（和文）インポライトネスに関する日韓対照研究：攻撃的発話に対する反応

研究課題名（英文）Japan-Korea contrast study on impoliteness: Reactions to Aggressive Utterances

研究代表者
河　正一（HA, Jeongil）

大阪公立大学・国際基幹教育機構　・准教授

研究者番号：２０８１２１５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：中学生・高校生・大学生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度とその反応の相関関係を分析した。
社会的力関係における利益の衝突は、談話参加者間の利益または不利益として表れる。そこで、利益の衝突として表れる攻撃的発話を相手の責任の有無に置き換え、聴者の責任による攻撃的発話と聴者の責任ではない攻撃的発話に分けた。その上、攻撃的発話の対象としての社会的価値を「性格」「能力」「外見」「所属」に分けて日韓対照研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
インポライトネスは、社会的価値を脅かす言語行動として、互いの社会的価値の衝突から生じる言語行動である。ゆえに、インポライトネス研究は、社会的秩序や価値体系を明確に示すことにつながり、円滑なコミュニケーションの手助けとなる。そこで、相手の社会的価値を脅かす攻撃的発話を取り上げ、言語行動の動機付け（利益の対立と衝突）と関連して、攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応の相関関係について、大学生・高校生・中学生を対象に日韓対照研究を行った。今後、異文化理解という言語教育の材料として有効に活用できるであろう。

研究成果の概要（英文）：This study set out to investigate how threatening aggressive utterances could be to the social values of counterparts by analyzing middle, high school, and college students’ displeasure and reactions to aggressive utterances in South Korea and Japan. A conflict of interest in social power relations is manifested in an advantage or disadvantage between conversation participants. In this study, aggressive utterances stemming from a conflict of interest were converted according to the responsibilities of counterparts and divided into those accountable by the listener and those unaccountable by the listener. The objects of aggressive utterances were classified for their social values according to personality, competence, appearance, and affiliation to conduct a contrastive study between South Korea and Japan.

研究分野：社会言語学・韓国語学

キーワード：インポライトネス　攻撃的発話　社会的価値　不愉快度　反応

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本国内におけるインポライトネスに関する研究は非常に乏しい。なお、欧米における多くのインポライトネスの研究は、Brown & Levinson（1987、以下 B&L とする）のフェイス概念を援用しているが、インポライトネスにおけるフェイス概念の援用は 2 つの矛盾をもたらす。1 つ目は、B&L のフェイス概念は互いのフェイス保持を前提として設けられた理性的かつ合理的な行為者の概念である。ゆえに、インポライトネスの研究にフェイス概念をそのまま援用してしまうと、感情の発散や八つ当たりなどといった非理性的な行為として現れるインポライトネスを合理的な行為者がなぜ起こしてしまうのかという動機づけに矛盾が生じてしまう。2 つ目は、B&L のフェイス侵害行為とは、フェイス侵害行為が引き起こす可能性のあるフェイス損傷を和らげるために設けられた、いわゆる補償としての行為であり、その根源的な目的は互いのフェイス保持にある。しかし、インポライトネスにおけるフェイス侵害行為とは、談話参加者のフェイス保持ではなく、相手側のフェイスを侵害する行為への実行に焦点が置かれるため、ポライトネスとインポライトネスにおけるフェイス侵害行為とはその焦点が異なる。

それにもかかわらず、従来の言語行動の分析では、専らポライトネスの観点からインポライトネスを論じてきた。例えば、「親友の誘いをどのように断りますか」「一番大事にしていた CD を同性の親友に貸したが、返してもらったところ、アルバムの表紙と CD に傷が付いていた」という状況における断り・不満表明をどのように表すかという調査である。無論、われわれの言語行動の主たる目的は、円滑なコミュニケーションの遂行にある。ゆえに、効果的なコミュニケーションの方法として、相手に配慮を示すわけであるが、ポライトネスからの言語分析の偏重は、丁寧な断り・不満表明のみが重視され、攻撃的かつ批判的な言語行動としての「私とは関係ない！」「なぜ、私が手伝わなければならないの（か）」などといった言語行動は最初から自ずと排除されてしまう。

こうしたポライトネスへの偏りは、言語行動の全体像から言語行動の動機付けとは何かという根本的な問題点をないがしろにしたことから起因する。すなわち、相互行為における言語行動とは何か、なぜ、そのような言語行動をとるか、という観点の欠如が自然とポライトネス以外の言語行動の選択を考慮しないという結果をもたらしたと考えられる。

以上のように、行動全体をトータルで捉えず、言語ストラテジーだけに焦点を当てる研究アプローチは、円滑なコミュニケーションの遂行という観点からポライトな言語行動の分析だけに偏重をもたらし、このことは、さらに言語行動の根本的な動機付けとは何かという点をないがしろにしてしまったと言えよう。そこで、上記の疑問に着目し、行動全体をトータルで捉え、言語行動の動機付けと関連して、攻撃的発話に対する印象とその反応について調査・分析する。

２．研究の目的

インポライトネスは、社会的価値を脅かす言語行動として、互いの社会的価値の衝突から生じる言語行動である。ゆえに、インポライトネス研究は、社会的秩序や価値体系を明確に示すことにつながり、円滑なコミュニケーションの手助けとなる。そこで、相手の社会的価値を脅かす攻撃的発話を取り上げ、言語行動の動機付け（利益の対立と衝突）と関連して、攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応の相関関係について、大学生・高校生・中学生を対象に日韓対照研究を行う。

一般に人々の言語の一生の骨組みがほぼ決まる言語形成期は、2 歳～3 歳から 12 歳～13 歳頃までと言われる(日本語教育学会編 2005：803)。ということは、中学生の時期に言語形成期が終わり、高校生・大学生の時期を経て言語意識及び価値体系が確立していく。とりわけ、大学生の時期は、高校生の時期とは異なって高い教養と専門的能力を培うと共に、アルバイトや就職活動を通じて多様な対人関係や社会性を身に着ける時期でもある。ゆえに、言語形成期から発達期、さらに言語運用能力またはコミュニケーション能力の変化を比較・分析するため、中学生・高校生・大学生を調査対象とした。

３．研究の方法

言語行動の評価は、談話参加者における社会的価値とは何かと共に、社会的力関係における利益の衝突がいかに反映されて言語行動として現れるか、これらの要因を考慮しなければならない。そこで、利益の衝突として現れる攻撃的発話を相手の責任の有無に置き換え、聴者の責任による攻撃的発話と聴者の責任ではない攻撃的発話に分ける。その上、攻撃的発話の対象として、「性格」「能力」「外見」「所属」に分ける[1]。つまり、社会的力関係や利益の衝突(責任の有無)、攻撃の対象を総合的に考慮し(24 場面)、下記のように攻撃的発話に対する印象と反応を尋ねた。

---

[1] 本研究で用いた攻撃的発話の対象は、われわれが社会的活動を営むうえで、重視する価値体系とは何か、また価値体系に影響を及ぼしやすい要因とは何かという観点から、日本人の価値体系(原 2013)や韓国人の価値体系(김태윤 2016)、ほめの対象に働く価値観の日韓中比較(関崎・金・趙 2017）を参照し、「性格」「能力」「外見」「所属」を取り出している。

場面：一週間頑張って作成した文化祭の企画書を先輩に見せたら、先輩に「これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないじゃん。まったく、使えないな」と言われた。

1. 発話を聞いてどの程度、不愉快に感じますか？

感じない　　感じる　　とても感じる

2. 発話を聞いてどのような反応を示しますか？
①何も言わず、沈黙する。
②ごめんなさい。すぐやり直します。
③まだ経験不足で、時間を考慮していませんでした。
④行事の時間が考慮されていない点はありますが、自分なりには結構できたと思いますが。
⑤行事の時間が考慮されていないとはいえ、使えないというのは失礼じゃありませんか。

従来の多くの調査方法では、河(2019)が指摘したように特定の場面に対する言語ストラテジーを直接、記入する談話完成タスクが多かった。しかし、談話完成タスクは、意識的であれ、無意識的であれ、円滑な言語コミュニケーションとしてのポライトな言語ストラテジーへの偏りが生じやすいがゆえに、相手に対する攻撃的かつ批判的なインポライトネスの要素が表れにくい。このことは、多くの断り・不満表明の先行研究において、インポライトネスに関わる言語行動がほとんど表れなかったことからも示唆される。
そこで、本調査では이성범(2015)を参照し、攻撃的発話に対する反応として、それぞれの場面において A～E というストラテジーを提示し選択する方法を採用した(下記は､能力の例である)。

A(沈黙：何も言わず、沈黙する)
何も言わず、沈黙する。
B(謝罪：謝罪する)
申し訳ございません。すぐやり直します。
C(解明・言い訳：解明または言い訳をする)
申し訳ございません。徹夜で作業していたので、ミスが多かったと思います。
D(反駁：自分の考え方を明確に示す)
申し訳ございませんが、企画書とゆとり世代とは関係ないと思いますが。
E(批判：相手の失礼さを指摘・批判する)
企画書のミスのことで、ゆとり世代はだめだというのは、失礼じゃありませんか。

以上、社会的力関係(「話者>聴者」「話者=聴者」「話者<聴者」)や責任の有無、攻撃の対象(「性格」「能力」「外見」「所属」)を取り入れ、下記の 24 の質問項目を作成した。
24 の質問項目を社会的力関係や責任の有無、攻撃の対象によって分類すると、表 1 となる。

表 1. 24 の質問項目の詳細(話者＝話、聴者＝聴)

		1	17	10	14	24	21
性格	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無
		7	11	22	5	2	18
能力	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無
		15	20	6	3	9	12
外見	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無
		23	4	8	13	16	19
所属	力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
	責任	有	無	有	無	有	無

例えば、「性格」における質問 1 と 17 は、聴者の責任の有無、すなわち居眠りと人身事故を理由に遅刻した際に、先輩(話者)に言われる場面であり、10 と 14 では、友人に言われる場面で、24 と 21 は、後輩に言われる場面である。同様に聴者の責任の有無によって少し状況は違うものの、「能力」「外見」「所属」においても同様の組み合わせで作られた。

４．研究成果

調査は、2020 年 11 月から 2021 年 8 月にわたって行った。有効回答者の内訳は、表 2 の通りである。

表 2. 回答者の内訳（韓国：網掛け）

		中学校		高校				大学		
		A	B	C	D	E	F	G	H	I
性別	男	84	105	22	34	21	79	40	60	123
	女	69	163	34	0	61	106	68	28	122
全体		153	268	172			185	196		225

中学生調査の場合、質問項目 24 問の「不愉快」×「国」の 2 要因分散分析を行った結果(SPSS)、「不愉快」の主効果は［F(23,9637)=53.09,p<.001］で有意であった。なお、「不愉快」と「国」の交互作用が 0.1%水準で有意であり（[F(23,9637)=4.67,p<.001]）、「国」の単純主効果は、0.1%水準で有意であった（[F(1,419)=16.57,p<.001]）。

分析の結果をまとめると、以下の通りである。

・日韓共に、聴者の責任のある攻撃的発話に対する不愉快度は、「所属＞外見＞能力＞性格」であり、聴者の責任のない攻撃的発話では、日本は「所属＞外見＞能力＝性格」で、韓国は「所属＞能力＞外見＞性格」であった。

・聴者の責任の有無を問わず、すべての項目において日本より韓国の不愉快度が高く表れた。

・聴者の責任のある場合、日本より韓国は不愉快度が高い分、その反応も重くなる傾向が見られた。しかし、日本では攻撃の度合いが高い「外見」「所属」さえも、B（謝罪）の反応が広く見られた。また、相対的に不愉快度が低かった「性格」「能力」において、日本は B（謝罪）か C（解明・言い訳）のパターン化が顕著であったが、不愉快度が高くなるにつれてむしろ反応が多様化された。一方、韓国は最も不愉快度が高い「所属」では、D（反駁）か E（批判）の反応が多かったが、その他ではパターン化というより多種多様な反応が多かった。

・「性格」と「能力」では、聴者の責任のある場合に比べ、責任のない場合が日韓共に重い反応が示される傾向が見られたが、不愉快度が高い「所属」では、むしろその反応が逆に表れ、とりわけ韓国ではその特徴が顕著であった。聴者の責任でもない攻撃的発話に対して、攻撃的発話の所在（責任の有無）を明確にし、これ以上、互いの関係を悪化させたくないというフェイスへの保持が働いたためではないかと思われる。

・社会的力関係では、日本より韓国のほうが重視される傾向が見られた。ただし、日本より不愉快度を高く示す韓国では、相対的に不愉快度の低い「性格」「能力」に対して社会的力関係を考慮する一方、日本は不愉快度の高い「外見」「所属」に対して社会的力関係を考慮する。

・日本ではあまり男女の違いが見られなかったものの、韓国はすべての項目において女性の不愉快度が高くて重い反応が示された。

高校生調査の場合、質問項目 24 問の「不愉快」×「国」の 2 要因分散分析を行った結果(SPSS)、「不愉快」の主効果は[F(23,8165)=111.12,p<.001］で有意であった。なお、「不愉快」と「国」の交互作用が 0.1%水準で有意であったが([F(23,8165)=9.99,p<.001])、「国」の単純主効果は、有意ではなかった([F(1,355)=0.17,n.s.])。

分析の結果をまとめると、以下の通りである。

・日韓共に、聴者の責任のある攻撃的発話に対する不愉快度は、「所属>外見>能力>性格」であり、責任のない攻撃的発話では、日本は「所属>外見=能力>性格」で、韓国は「所属=能力>外見>性格」であった。

・聴者の責任のある場合、日本では相対的に不愉快度の低い「性格」と「能力」の反応として、B(謝罪)の反応が顕著に表れた。そして、日韓共に不愉快度が高くなるにつれ(「所属>外見>能力>性格」)、それに対する反応も重くなるものの、日本より韓国のほうがより重い反応を示す傾向があった。

・「性格」と「能力」では、聴者の責任のある場合に比べ、責任のない場合が韓日共に重い反応が示される傾向が見られたが、不愉快度が高い「外見」と「所属」では、むしろその反応が逆に表れ、とりわけ、韓国では、その特徴が顕著であった。聴者の責任でもない攻撃的発話に対して、攻撃的発話の所在(責任の有無)を明確にし、これ以上、互いの関係を悪化させたくないというフェイスへの保持が働いたためではないかと思われる。

・社会的力関係では、日本より韓国のほうが重視される傾向が見られ、特に後輩からの攻撃的発話に対してより重い反応が示される傾向があった。

・日韓共にすべての項目において女性のほうが男性より、不愉快度が高く示された。とりわけ、聴者の責任のある場合は、日韓共に「外見」に対する攻撃的発話の不愉快度において最も男女の差がつき、責任のない場合では、日本は「所属」で、韓国は「外見」で男女の差が大きかった。

・日韓共に不愉快度が高くなるにつれ、A(沈黙)の反応が一定の割合で表れている。

大学生調査の場合、質問項目 24 問の「不愉快」×「国」の 2 要因分散分析を行った結果(SPSS)、「不愉快」の主効果は［F(23,10097)=154.01,p<.001］で有意であり、「不愉快」と「国」の交互作用は 0.1%水準で有意であった(［F(23,1007)=49.15,p<.001］)。しかし「国」の単純主効果は

有意ではなかった(［F(1,439)=0.49,n.s］)。

・聴者の責任のある場合、日本は「所属＞外見＞能力＞性格」で、韓国は「外見＞所属＞能力＞性格」であり、「外見」に対する韓国の女性の不愉快度が著しく高かったのが日韓の差を生み出した。

・聴者の責任のない場合、日本は「所属＞能力＞外見＞性格」で、韓国は「能力＞所属＞外見＞性格」である。すなわち、聴者の責任のある場合では、「能力」を除いて韓国の不愉快度が高く表れ、聴者の責任のない場合では、すべての対象において日本の不愉快度が高く表れた。

・日韓共に男女の不愉快度に対する意識の差が顕著である。日本は、聴者の責任の有無を問わず、すべての対象において女性の不愉快度が高かった。韓国でも聴者の責任のない「所属」を除いて女性の不愉快度が高く表れた。とりわけ、日韓共に聴者の責任の有無を問わず、「外見」に対する不愉快度の差が顕著である。

・日韓共に不愉快度が高くなるにつれ、その反応も重くなる傾向が見られるが、日本より韓国のほうが重い反応を示す傾向がある。日本は、「性格」「能力」では聴者の責任の有無によって、B(謝罪)と C(解明・言い訳)の使い分けというパターンが見られた。そして、「外見」でも B(謝罪)と C(解明・言い訳)が多いものの、最も不愉快度が高かった「所属」では B(謝罪)と D(反駁)の反応が多かった。一方、韓国は「性格」では B(謝罪)と C(解明・言い訳)、「能力」では B(謝罪)、D(反駁)、E(批判)、「外見」では C(解明・言い訳)、D(反駁)、E(批判)、「所属」では B(謝罪)と D(反駁)のように攻撃の対象や聴者の責任の有無、社会的力関係によって多様な反応が見られた。つまり、日本は社会的力関係より聴者の責任の有無が反応の選択に大きく作用する一方、韓国は聴者の責任の有無はもとより、社会的力関係もある程度重視する傾向がある。

・日本は聴者の責任の有無と関連して「性格」「能力」「所属」では聴者の責任のない場合の不愉快度が高くなるが、韓国ではむしろ「外見」「所属」の不愉快度が低くなる。ところが、その反応は聴者の責任のある場合と比較した場合でもそれほど変わらない。つまり、聴者の責任の有無より「外見」や「所属」という攻撃の対象を一層重んじることへの表れであろう。

・不愉快度が高くなっても、中学生・高校生調査に比べて最も強い E(批判)の反応がそれほど見られなかった。相手に社会的価値が脅かされたにもかかわらず、それに応酬をしない。すなわち相手への強い批判を避けることにより、さらなる攻撃を受けかねない状況を避けるためであろう。このことは、日韓共に不愉快度が高い「外見」「所属」の反応として、A(沈黙)が一定の割合で表れ、とりわけ女性の使用率が高くなることと相通じる。

・日韓共に不愉快度が高くなるにつれ(特に「外見」「所属」)、女性は男性より重い反応が示す傾向が見られた。

参考文献

李善姫(2004)「韓国人日本語学習者の不満表明について」『日本語教育』123、pp.27-36

井出祥子(2006)『わきまえの語用論』大修館書店

関崎博紀・金庚芬・趙海城(2017)「ほめの対象に働く価値観の日韓中比較:大学生へのアンケート調査の結果に対する因子分析を通して」『社会言語科学』20(1)、pp.161-175

日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店

河正一(2014)「インポライトネスにおけるフェイス侵害行為の考察」『地域政策研究』17(1)、pp.93-116

河正一(2017)「韓国語教育におけるインポライトネスの教授法:社会的・文化的価値体系及び言語的側面からの提案」『韓国語教育研究』7、pp.139-157

河正一(2019)「社会言語学的調査の状況:言語行動に関する日韓対照研究を中心に」『計量国語学』31(8)、pp.572-588

河正一(2022)「攻撃的発話に対する韓日高校生の反応:日韓対照研究」『日本言語文化』59、pp.81-103

河正一・森岡千廣(2022)「社会的価値を脅かす攻撃的発話に対する反応:日韓中学生調査を中心に」『日本韓国研究』2、pp.63-81

原聰(2013)『日本人の価値観(異文化理解の基礎を築く)』かまくら春秋社

三宅和子(1994)「詫び 以外で使われる詫び表現:その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係」『日本語教育』82、pp.134-146

薮内昭男(2015)『ポライトネスとフェイス研究の諸相:大きな物語を求めて』リーベル出版

김태윤(2016)「한국인의 가치체계 변화 분석 및 가치체계 재분류: 2013 년 한국인 의식.가치관 조사 보고서를 활용하여」『언어와 문화』12-2, pp.85-112

이성범(2015)『언어적 무례함에 대한 실험화용적 연구: 공격성 발화를 중심으로』서강대학교출판부

Bousfield, D. (2008) Impoliteness in Interaction, Amsterdam, John Benjamins.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge: Cambridge University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 河正一・金美順・大上博右	４．巻 1
２．論文標題 攻撃的発話に対する反応 ―高校生調査を中心に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本韓国研究	６．最初と最後の頁 90-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河正一	４．巻 59
２．論文標題 攻撃的発話に対する韓日高校生の反応―韓日対照研究の観点から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本言語文化	６．最初と最後の頁 81-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河正一・森岡千廣	４．巻 2
２．論文標題 社会的価値を脅かす攻撃的発話に対する反応―日韓中学生調査を中心に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本韓国研究	６．最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河正一・趙智英・金民主	４．巻 95
２．論文標題 社会的価値を脅かす攻撃的発話に対する反応―韓日大学生調査を中心に―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本研究	６．最初と最後の頁 83-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 河正一
2．発表標題 社会的価値を脅かす攻撃的発話に対する日韓高校生の反応
3．学会等名 朝鮮語教育学会第90回例会
4．発表年 2022年

1．発表者名 河正一・森岡千廣
2．発表標題 社会的価値を脅かす攻撃的発話に対する日韓中学生の反応
3．学会等名 日本韓国研究会第2回研究大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 河正一・趙智英・金民主
2．発表標題 社会的価値を脅かす攻撃的発話に対する反応―日韓大学生調査を中心に―
3．学会等名 日本韓国語教育学会第13回学術大会
4．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関